

## 原体験と教会闘争

実存思想の創始者とされるキルケゴール Søren Kierkegaard (1813～1855) ほど、謎に満ちた思想家もいないだろう。彼は42年という短い生涯の間に、匿名及び実名で実におびただしい著作を書いたが、最晩年の1年間はデンマーク国教会を相手に激烈な攻撃を行った。これが有名な「キルケゴールの教会闘争」として知られるものである。その出発点は彼の独特なキリスト教体験にあった。

幼少のころ、彼は父親から次のような話を何度も聞かされた。群衆はイエス・キリストに唾を吐き、ののしり、鞭打ったあげく、最後には十字架にくぎ付けにした。だが、お前はそのイエス・キリストをこそ真に愛しておくれ、と。しかも、そうした話を、父親は真摯な祈りの中で、彼に語り聞かせたのである。このことが幼い子供にとって強烈な原体験になったことは、想像に難くないだろう。

キリスト教にとって真理はイエス・キリストであり、キリストをおいて真理はありえない。その真理そのものに向かって、人々は唾を吐き、迫害し、死に至らしめたのである。真理に忠実に仕えようとするならば、誰もがこの世では人間として不幸になることを覚悟し、いやむしろ殉教者とならなければならない。殉教者こそが真理の証人たるにふさわしい存在だからである。過激といえど過激であるが、キルケゴールのキリスト教理解はこれほどまでに徹底したものであったのだ。

この視点からすれば、当時のデンマーク国教会の状況はまさにその正反対であった。国家の教会として世俗世界とすっきり融和し、その本来の異質性や断絶性のゆえにキリスト教が人々につきつける「躓き」の契機を失わせ、そしてこれを通じて得られる真理をも見失わせるに至ったというのである。この躓き(徹底した罪の自覚)を通じての救いという逆説こそが、新約聖書のキリスト教の説く教えなのである。

キルケゴールはまず新聞寄稿という形で教会闘争を開始した。その後は、自ら「瞬間」という名の小冊子を10日おきぐらいの速度で矢継ぎ早に刊行し、その筆鋒をますます激しいものにしていった。その中には例えば、「キリストが富める青年に向かって言われた言葉『君の持物をことごとく売って一貧しい者に与えよ』と、牧師の言う言葉『君の持物をことごとく売って一私に与えよ』とは、同じ教えなのだろうか」などと、実に辛辣な言葉も数多く書かれている。彼は、第10号を発行準備のさ中に、街路上で昏倒して病院に担ぎ込まれ、そこで間もなく亡くなった。

## 国教会の精神的出来事として

キルケゴールの教会闘争は、単に一人の風変りな人物が教会を非難・攻撃したというものでは決してない。それは、デンマーク国教会におけるれっきとした大きな精神的出来事である。

もちろん当初は教会当局もそれが分からず、キルケゴールの所業は全く困惑と不快<sup>もよお</sup>すものであり、客観的に見ても単なる「教会の嵐」のようには受け止められなかった。彼の死後、次第に彼の思想と行動の真意、また教会側への深い精神的関わりが判明してくるにつれて、キルケゴール研究者のみならず、

デンマーク教会史の研究者も彼の教会闘争の精神的意義を重要視するようになった。

しかし、そもそも、このような認識を可能にさせたものは、一体何なのであろうか。それは一言で言えば、プロテスタント信仰に基づく批判精神であり、この批判精神があるからこそ可能な理解だったのである。つまり、そこにあるのは、「真理はどこまでもイエス・キリストの側にあり、人間の<sup>こしら</sup>拵えものである教会の側にはない」という、プロテスタンティズムの厳粛な原則なのである。さらに言えば、プロテスタンティズムの批判精神は、そうした批判を通じて自己自身のあり方をも批判していくという自己遡及的なところに特徴がある。キルケゴールの教会闘争がデンマーク教会史そのものの重要な一駒になるのは、実はどちらもキリスト教の真理を求めてそれを確立しようとする精神的運動に合流していくからなのである。

## 真理を求めてやまない愚かさ

キルケゴールの人物や思想をめぐっては、いまだに多くの誤解や曲解がなされている。もちろん彼に奇矯で歪んだ側面が見られないわけではない。しかし、我々が宗教というものを自らの主体的真理の問題として受け止めようとするならば、彼の預言者的な側面にこそ注目すべきである。

公認キリスト教、すなわち国教会に真正面からたった一人で刃向かい、力尽きて倒れたその姿は、世俗的・人間的な意味では全く「愚か」としか言いようがないだろう。もっと賢しく要領よくやる方法は他にもあったにもかかわらず、まるで風車に突進するドンキホーテさながらではないか。けれども、彼の教会闘争は、文字通り人生を賭したきわめて本質的な問題提起の姿だった。彼は、自らをキリスト教の「調整薬・矯正剤」として位置付けており、新しい形態の改革を訴えているわけではなかった。しかしそのための自己認識は、神の摂理の下での出来事として、神に捧げられた殉教者のあり方を取らざるを得なかったのである。それは、キルケゴール研究者の大谷愛人の言葉を借りていえば、まさに「真理を求めてやまない愚かさ」の姿である\*。

キルケゴールは、キリスト教世界にあつて、「大いなる錯覚」に過ぎないキリスト教世界に本来のキリスト教の絶対的尺度を当てはめようと、単独者として自らの全人生を賭けた。単独者とは、神に対して自己自身の全責任・全存在を背負って関わろうとする人間のことを指す。今日の時代においてキルケゴールを読む意味も、真理と真摯に関わりつつ、絶えずこれを求める単独者としての人間の姿を知り、そのことを通じて自らの生き方を単独者として反省的に深めていくところにある。それは労苦に満ちた「愚か」な営みかもしれないが、この探究がないところに、信仰の真実はある得ないし、また学問や人生そのものの真実も見出せないであろう。

\*大谷愛人『キルケゴール教会闘争の研究』(勁草書房、2007年)を参照。なお、大谷氏のこの研究書は1100頁を超える大著であり、実に圧倒的な迫力で、キルケゴールの教会闘争の全貌をあますところなく説き起こしている。